

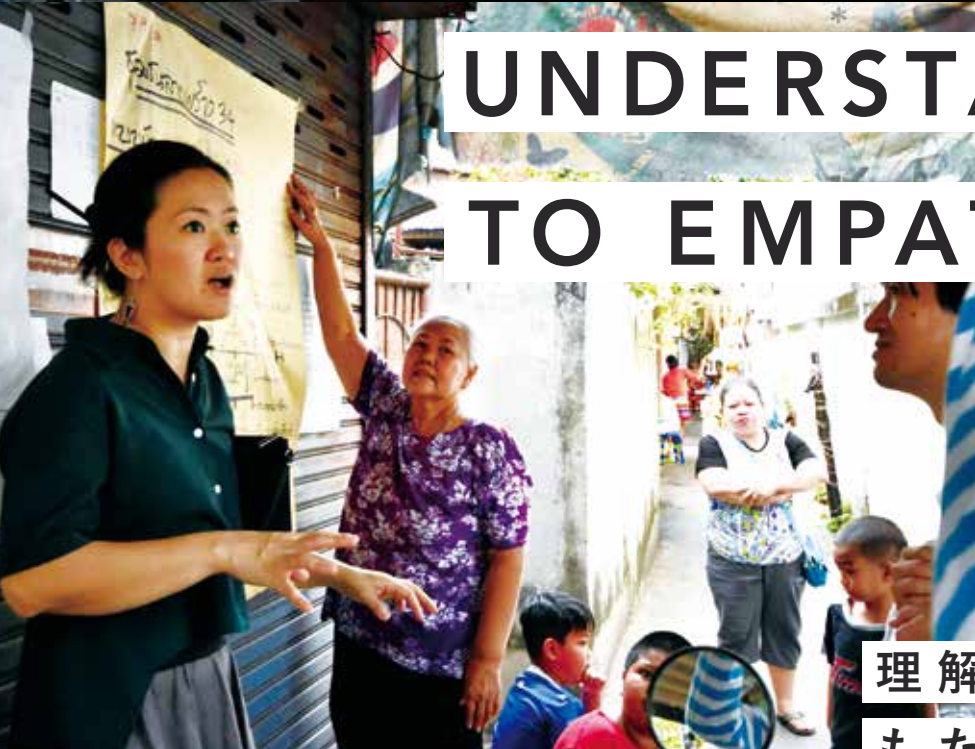


WHAT BRINGS

US BEYOND

UNDERSTANDING

TO EMPATHY?



理解から共感を  
もたらすものとは？



Series of Dialogues for Sharing the Concept of International Grant Program

国際助成プログラム 対話と学びあいの記録



## はじめに

このブックレットには、

トヨタ財団国際助成プログラムが掲げる、相互交流と学び合いを通じて何が得られ、どのような変化が起きたのか、助成を受けたプロジェクトのメンバーが、トヨタ財団のプログラムオフィサー（PO）と語った内容が収録されています。

過去の実施プロジェクトから現在進行中のプロジェクトまで、合計で12プロジェクトからのメンバーが、フィリピン、タイ、日本の各地に集まり、数日間にわたってその経験を語り合いました。

助成プログラムの募集要項や、各プロジェクトの報告書等では明確になりづらい、プロジェクトで成功した部分や、失敗してしまった点、将来への展望について、率直に共有しています。

それぞれのプロジェクトのゴールは多岐にわたりますが、トヨタ財団の国際助成プログラムが、相互交流と学びあいというアプローチで、そのプロセスをいかにサポートすることを目指したのか、読者の皆様にお届けします。国や地域を越え、セクターを越えて課題解決に取り組む方々のご参考になれば幸いです。

はじめに	p.02
ダイアログ開催地	p.04
3つのダイアログについて	p.05

<b>vol.1</b>	<b>フィリピン</b>	p.06
	Introduction	p.07
	Members	p.08
	Dialogue in Baguio	p.10

<b>vol.2</b>	<b>タイ</b>	p.14
	Introduction	p.15
	Members	p.16
	Dialogue in Bangkok	p.18

<b>vol.3</b>	<b>日本</b>	p.22
	Introduction	p.23
	Members	p.24
	Dialogue in Sendai	p.26

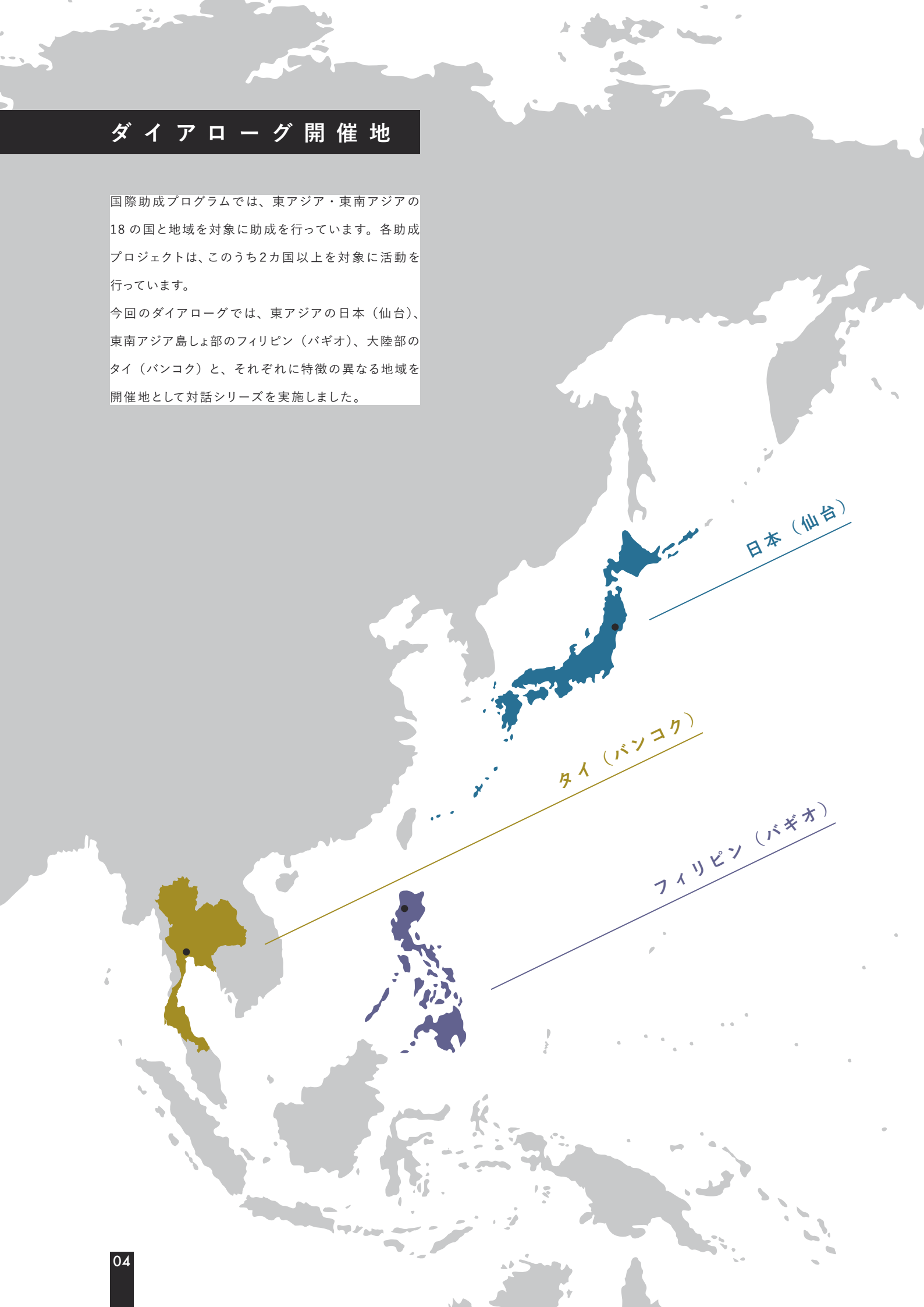
トヨタ財団からのメッセージ	p.30
トヨタ財団について	p.32
トヨタ財団国際助成プログラムについて	
応募をご検討の方へ	p.33



## ダイアログ開催地

国際助成プログラムでは、東アジア・東南アジアの18の国と地域を対象に助成を行っています。各助成プロジェクトは、このうち2カ国以上を対象に活動を行っています。

今回のダイアログでは、東アジアの日本（仙台）、東南アジア島しょ部のフィリピン（バギオ）、大陸部のタイ（バンコク）と、それぞれに特徴の異なる地域を開催地として対話シリーズを実施しました。



## 3つのダイアログについて

トヨタ財団国際助成プログラムでは、国際性、越境性、双方向性、先見性を掲げ、プロジェクトが扱うテーマにかかわらず、チームの組み立てや課題へアプローチする方法論を重視しています。

このダイアログシリーズは、助成対象者と財団プログラムオフィサーの率直な対話を通して、国際助成プログラムの意図をより具体的に紐解いていくことを目指して実施されました。

vol.1

フィリピン



全3回のダイアログはルソン島北部の都市バギオからスタートしました。同地を拠点にする山下さんのもとに、マニラからアシスさん、ネグロス島をフィールドにする寺田さん、そしてカンボジアから吉川さんが集まり、文字通り早朝から夜中まで語り合いました。クロスセクターでの国際的な交流プロジェクトにおけるチームビルディングの難しさ、インパクトの考え方、他のプロジェクト関係者との知見の共有の重要性など、対話のなかで触れられた話題は多岐にわたります。それぞれのプロジェクト目標に向かうなか、どんな障壁に立ち向かっていったのでしょうか。ダイアログのなかでは、その経験を他者と共有する必要性についても触れられています。



vol.2

タイ



第2回目のダイアログは、タイの首都バンコクで開催されました。同地を拠点としてプロジェクトをスタートさせたばかりのコッチャゴーンさん、現在進行中のプロジェクトをとりまとめる村松さん、藤澤さん、過去の助成をきっかけに新たなプロジェクトに取り組む古山さんが集まりました。全員がタイを対象地域に含んでいたものの、それぞれ分野が大きく異なるということもあり、テーマを越えて共通するファシリテーションの在り方や異分野間の出会いがプロジェクトにもたらす効果、長期的にネットワークをつないでいくことの意義などに話題がおよびました。理解し合うことの難しさを認識しながら、それでも対話を続けることの価値とおもしろさを改めて実感する回となりました。



vol.3

日本



第3回目のダイアログは、仙台で開催されました。渡辺さん、門脇さん、中川さん、森さん、北川さん、内山さんという現在助成を受けて活動している皆さんのほか、過去に助成を受け今その成果が着実に実を結びつつあるという藤本さんや、助成対象者とは異なる立場から国際交流経験豊富な小川さんをお招きし、過去・現在・未来を横断する厚みのある議論が展開されました。仙台を拠点に活動する(一社)アート・インクルージョンのコーディネートのもと、障がい者の方々や被災者の方々との協働作業を踏まえ、コミュニケーションの重要性が強調された他、トヨタ財団への要望もざっくばらんに述べられ、本企画の最終回にふさわしいダイアログとなりました。



# フィリピン

vol.1

January 25-27, 2018





# Introduction



バギオはフィリピンの首都マニラのあるルソン島北部の都市で、その人口は約35万人。コーディリエラ地方とよばれる山岳地帯の入り口に位置し、その中心地でもあるバギオは避暑地としても有名で、大統領が夏を過ごす別荘もあります。マニラからはバスで4時間程度ですが、悪名高いマニラの渋滞にはまってしまうと、さらに数時間かかります。

同地の目抜き通りであるセッションロードは常に人で溢れ、通りの両脇にはおしゃれなショップやカフェが立ち並び、大きなショッピングモールもあります。大通りから小路に入れば、昔ながらの市場も大賑わい。お米、

野菜、果物、魚、様々な雑貨に加え、焙煎したてのコーディリエラ地方各地からのコーヒーを楽しむこともできます。

今回のバギオ訪問でお世話になった山下彩香さんは、2012年にEDAYAの活動をスタート。バギオを拠点に、この地方の音楽文化や暮らしにまつわるモチーフを取り入れたハンドメイドアクセサリーや、オリジナルのデザインを施した民族楽器の制作・販売を行っており、その中心となる素材が、トヨタ財団が助成しているプロジェクトでもキーとなっている「竹」です。中心地の喧騒から車で10分ほどのところにある彼らの拠点は、共同創設者で竹アー

ティストのエドガーさんの工房も兼ね、対話プログラム開始前のアイスブレイクでは、参加者全員で竹楽器の制作と演奏を体験しました。

実はここ、エドガーさんが仲間とともに竹をふんだんに使って建てた手作りの家。山肌で傾斜のある土地を平坦にならすことから始め、少しずつ手が加えられ、現在は母屋と離れに分かれています。ここは一般の方も泊まれるゲストハウスにもなっており、バギオ滞在中は我々も宿泊し、「同じ釜のメシ」を食べながら、文字通り早朝から深夜まで議論を行いました。



# Members

## 共通の竹文化で地域を再発見



山下 彩香  
2016,17年度助成対象者  
EDAYA ディレクター

フィリピン・カリంగా族出身のエドガー・バナサンと共にユニークな竹のアートプロジェクト「EDAYA」を共同設立。そのジュエリーは、日本でソーシャルプロダクト賞 2016 を受賞、2017年には初のアートブックを出版。



## 日本やフィリピンの地方の生活様式や 伝統文化の価値の発見のための 「竹」を軸としたワークショップマニュアルの制作

フィリピンのルソン島北部山岳地帯と日本の高知県土佐山で竹文化の現地調査を行い、両地域にとって身近な存在である「竹」を使った教育モジュールを開発した。2017年にはミャンマーのチン州を対象地に加え、失われ

つつある伝統文化の価値を再発見するプロセスを通して、各地域に伝統と現代的ニーズが融合した新たな暮らしの文化の可能性を提案することを目指す。



## 地域がつくる観光とは

## カンボジア、サンポー・プレイ・クック遺跡群と 沖縄県南城市における コミュニティ・ベースド・ツーリズムの確立に向けた学び合い

ともに世界遺産であるカンボジアのサンポー・プレイ・クック遺跡の周辺地域と、斎場御嶽を抱える沖縄県南城市の2地域で観光に携わるステークホルダーたちが交流。自らの価値

を再認識し、課題を解決できるプラットフォームを形成することを目指した。プロジェクトチームは両地域の相互訪問に加えて、イタリアのシチリアも視察した。



吉川 舞  
2016年度助成対象者  
ナプワークス代表

2008年早稲田大学人間科学部卒。その後2013年までカンボジアの遺跡修復チームにて現地広報を担当。2015年、Napura-works.Co., Ltdを設立。2017年7月に世界遺産に登録されたサンポー・プレイ・クック遺跡周辺地域にて、遺跡を通じて地球に刻まれた古代の記憶やその歴史と現代の人々をつないで、これからの未来の在り方をともに考える活動を行う。



## 移民子弟のライフストーリーをつむぐ



マルジャ・アシス  
2015年度助成対象者  
スカラプリニ  
移民センター  
調査・出版ディレクター

-----  
“Asian and Pacific Migration Journal”共同編集者。長年アジアにおける国際移民と社会変革に関わるプロジェクトに従事。

### 移民子弟と多文化家族のための包摂的な社会の実現に向けて フィリピン、日本、韓国を事例に

フィリピン、日本、韓国で自らの母国や移民先の国、あるいは両親の複数の文化が交叉する存在である国際移民としての子ども、および多文化家族に焦点をあてた「Enable

Kids Project」を実施した。具体的には各国における移民子弟・家族のためのサポートや現行プログラムの調査、各国ステークホルダーによる現地訪問・会合を行った。



## 若手農家の経験交流を支える

### 換金作物栽培地域における循環型有機農業の実践に向けた 若手農家リーダーの育成プロジェクト

単一換金作物栽培のリスクに直面するラオス（ボラベン高原）、東ティモール（エルメラ県）、フィリピン（ネグロス島）の若手小規模農家が相互交流を行った。特に、ファシリテーションを担った日本の（特活）APLAが長年支援

してきたネグロス島の農場兼農民学校で実践されている循環型農業のモデルをラオスや東ティモールのコーヒー生産地域に波及させる前提として、地域の課題に関する相互理解を深める交流を実現した。



寺田 俊  
2016年度助成対象者  
（特活）APLA事務局スタッフ  
（フィリピン担当）

-----  
大学で国際協力や地域開発について学んだ後、APLAのインターン等を経て2015年からAPLA事務局スタッフ。主にフィリピン（ネグロス、北部ルソン）での事業や日本国内の広報・イベント関連を担当。本プロジェクトではフィリピンと日本の調整、交流のファシリテーション、イロンゴ語（フィリピン・ネグロス西州の言語）の通訳を担当した。

## vol.1 Dialogue in Baguio

国際助成プログラムの助成を受けた関係者同士、そして財団プログラムオフィサー (PO) が対話を行う

「Dialogue with the Asian Neighbors」の初回は、フィリピンのバギオで開催されました。

## 1

## チームビルディングのプロセス

バックグラウンドが異なる人々をひとつにまとめるチームビルディングの過程では、どんな苦労がありましたか？

## コーディネーターとしての役割に徹しました。

▼寺田 俊 僕の所属する APLA という NGO が、コーディネーターとしての役割に徹したプロジェクトでした。

フィリピン、ラオス、東ティモールの各国から、それぞれ 3 人から 4 人の農民を選んだわけですが、トヨタ財団に応募するときは、個々のメンバーまでは決まっていなかったんです。各国に駐在する同僚と、メンバーの選び方を議論することからプロジェクトが始まりました。結論としては、誰が適切かを農民たち自身で決めてもらうということになりましたが、その選考プロセス自体がプロジェクトの一環でした。すべての選考が終わるまで、半年くらいかかりました。最初の 2～3 回の打ち合わせは、彼らにプロジェクトの目的を説明することに時間をかけました。

▼吉川 舞 私たちのプロジェクトでも同じです。コアになるメンバーは決まっていたけど、フィールドトリップに参加するメンバー一人ひとは、プロジェクト中に決めていきました。

▼寺田 彼ら、他の人を推薦し始めたんで

す。私より彼女のほうが適任だよ、って。

▼吉川 寺田さんたちは、彼らにプロジェクトのオーナーシップを持ってもらったってことですね。私はいくつかのコミュニティでメンバーを探しました。思っていたより時間がかかって、全員決まるのに 3 ヶ月かかりま

したけど。

▼寺田 それから、農民の多くは、新しい技術などに懐疑的なところがあります。僕らのプロジェクトではラオスからのメンバーのほとんどは女性だったんですが、彼女たちにとって、自分たちのコミュニティで得た知見をシェアする、というのはすごくハードルが高いんです。年長者に対してはなおさら。そこでファシリテーター役の日本人がフォローしました。

▼山下 昔からよく知っているフィリピン側のメンバー選定は簡単でした。モジュールを作るプロジェクトの経験がある人、アートや文化に造詣が深い人、それに若手も入れました。日本とミャンマーはキーパーソンを知っていたので、コーディネーターになってもらいました。

▼バナサン プロジェクトの持続可能性もメンバーを選ぶときの重要なポイントです。活動を続けるパッションを持っているかどうか。プロジェクトが終わっても、例え資金がなかったとしても、です。それから、彼らのバックグラウンドとか、地域コミュニティの人たち

とどうコミュニケーションを取るか、どんな仕事をしてきたか、というようなことにも注意しています。

アシスさんは 27 人の移民の子どもたちにライフストーリーを語ってもらうために、プロジェクトに参加してもらいましたね。どうやって探したんですか？

▼アシス その子どもたちがどういう子なのかを知っている各国のコーディネーターに推薦してもらいました。最初は彼ら自身にライフストーリーを書いてもらおうと思っていましたが、難しいことがわかって、何人かにはインタビューすることにしました。

## 2

## 課題は言葉とコンテキスト

▼吉川 大変だったのは、ローカルのコンテキストやプロトコル。私のプロジェクトメンバーの何人かは、本当に普通の村人。すごいパッションは持っているけど、それを他人にどう見せればよいかはわからない。言語の壁は言うまでもなくありました。プロジェクトのファシリテーターや通訳をやる人は、物事の背景を知っていたほうがいいけど、実際には難しいですね。ただ、それだけの壁があるなかでも、プロジェクトを通じて同じビジョンが共有できた、とも言えます。

▼山下 私たちも去年同じ課題に直面したから、今年はそうならないようにしたいな。

## パッションを持っているか。

▼アシス 私たちのプロジェクトでは、メンバー全員英語ができたし、翻訳もとてもうまくいった。スライドなどの資料は、多言語で準備できました。

▼吉川 通訳を担当する人を事前にコミュニティに入れて、もっと理解を深めてもらっておけばよかったかもしれない。

▼山下 プロジェクトによるんじゃない？寺田さんたちのプロジェクトなら、農民が実際に手を動かして見せられるけど、政策提言みたいなものだと、通訳・翻訳の問題は頻繁に起きる気がする。コンセプトを作ったり、







それを掘り下げたりするプロセスだと、影響はもっと大きそう。

▼寺田 農民の使う言葉がすごく専門的だから大変でしたよ。通訳がファシリテーターも兼ねてましたが、フィールドを訪問している期間中に毎日実施していたメンバー全員の振り返りミーティングの後、さらにファシリテーターだけで議論して、翌日以降のプログラムに反映させていました。

通訳やファシリテーターの能力が高いと、プロジェクト代表者は内容や目的に集中できますね。

▼アシス 相互理解と、その先に向かうときの大きな壁ですね。それから、英語でコミュニケーションすることある意味で強いられるけど、それが時にはその地域で使われていることばやコンテキストのニュアンスを失うことにもつながっていると思います。アジア地域の多様性の現実とも言えます。

**壁はたくさんあります。それでも一緒に仕事ができます。**

▼寺田 僕は毎晩のミーティングで出てくるメンバーからの意見を取り入れて、かなりフレキシブルにフィールド訪問を組み立てました。彼らは基本的にとってもシャイなので、まず顔見知りのファシリテーターと相談します。でも、自分の意見が他のメンバーの関心をひくと、自信がついてくるんです。

▼アシス 壁はたくさんあります。それでも一緒に仕事ができます。私たちが直面したいろんな障害は、相手や物事を理解していくプロセスの一環でしょう。

▼山下 プロジェクトをやるなかで、「あ!なんかあなたのことがわかったかも!」って思えるような瞬間がいくつもある。それってめちゃ

くちゃ素敵ですよ。

▼吉川 ほんとに。そういう瞬間が重なって、壁を超えて直接つながり合える。

カンボジアの人って、日本は何もかも完璧、みたいなイメージを持っているような気がする。「カンボジアは教わる側」で、「日本は教える側」っていう意識です。でも、ブレークスルーだと思える瞬間があったんです。カンボジア側メンバーの1人が、日本側のある地域に伝わる物語を聞いて、即興で舞踊を作ったんです。それで日本側の人たちにその振り付けを教えて、一緒に踊ろう、こうするんだ、って。ふとした瞬間に、「教える側」になっていた。こういう瞬間はいつ来るかわからないんですよ。

▼寺田 3ヶ国でのプロジェクトをやって気付いたんですが、ある国は、他の2つの国を比べることができるんです。誰もが第三者にもなれて、2つのうちどっちの技術や経

験が自分たちの地域に合うだろうか、って考えられる。

ピア・ラーニングですね。

「教える」「教えられる」の一方通行ではなく、より対等で双方向の相互学習といえいいでしょうか?

▼寺田 まさにそうです。それがモチベーションにつながっていたと思います。

**3  
プロジェクトのインパクトと  
コミュニティとの関係**

プロジェクトのインパクトについてはどうでしょうか?

▼吉川 観光産業でインパクトというと、収入と、ゲストの数の2つのポイントが注目されます。そういう意味で、相手を理解する、という点を重視するトヨタ財団の助成に出会えて、ラッキーでした。カンボジアにはたくさん寄付や助成が来ます。10年ほど前にはコミュニティ・ベースド・ツーリズムの発展などを目指して多くのNGOがやって来ました。でも、ほとんどは3年くらいで終わっちゃって、皆いなくなってしまう。種をまいても、水をあげる人がいない。

▼山下 私たちは、適切な人やコミュニティに、適切なタイミングで話ができていますか、注意しています。どれだけ彼らとコラボレーションしたいと思っても、誰かから助成を得ている、と言ったとき、コミュニティ側は「利用される」と感じてしまうかもしれない。実際に、そういう経験をたくさんしてきているんですね。メンバーを募るときには「日本に行けるよ」というようなインセンティブについては話しません。代わりに、文化に対するパッションや、スキルについて話します。相手の姿勢が変わってしまうことがあるから、お金は扱いが難しいですね。私自身、違うセクターにいる人と何かをするのはいつもチャレンジですが、ワクワクもします。いまやっているプロジェクトの最終段階にあたる9月のコーディネータ・バンブーデーでは、バギオ市政府の観光担当部署も巻き込もうと思っています。

▼バナサン コミュニティ側では、これまでの経験から「そっちの利益のために俺たちを使うんだろ」と考えるんです。例えば研究者が来て、村民にインタビューをする。でも、二度と帰ってこない。我々はコミュニティに自分たちがやったことを持ち帰るよう



にしています。全部は無理だとしても、調査や展覧会をした後に「こんなことをしてきました。あなた達のご協力のおかげです」と、コミュニティ側に見せます。

▼山下 最初は去年1年だけのつもりで作ったプロジェクトだったんですが、プロジェクト地のカリंगाと土佐山の地域のために何ができるか、を考えて、もう一度応募することにしました。この助成から、カリंगाと土佐山の小学校のビデオレター交流が始まったり、土佐山では竹の家を使ったマッサージスタジオの話が出てきたり、別のサイドプロジェクトにもつながっています。

長期的なインパクトについてはどうでしょうか？



## 長期的なインパクトを今すぐに測るのは無理です。

▼アシス 長期的なインパクトを今すぐに測るのは無理です。トヨタ財団の国際助成プログラムのような取り組みは、もっと長いスパンで見ると。何年後かに振り返って、「ああ、これはあのとき若手農家の戦略について、トヨタ財団の対話プログラムで学んだのがきっかけだった」ということはあるかもしれません。インパクトを問うことは必要ですが、どんなインパクトを測るべきか、を考えないと。それに、どんな違いや変化を生み出せたか、なんのきっかけになったか、ということも重要で、それは「客観的な指標」に縛られるものではないのでは。

我々も助成したプロジェクトが、将来につながるきっかけ、つまりトリガーになることを期待しています。

### 4

#### ネットワークと多様性

多様なプロジェクトに助成している、というのは、財団のアドバンテージになっていると思いますか？それとも、より大きいインパクトを目指して、何か特定のテーマに絞るべきだと思いますか？

▼山下 同じタイミングで助成を受けている藤澤先生（バンコクでの対話プログラムを参照）に勧められて、プノンペンでの展覧会に出ることになりました。バンコクではコッチャゴーンさん（バンコクでの対話プログラムを参照）に会ってきました。彼女は建築や都市デザインのバックグラウンドを持っていて、水の問題に取り組むプロジェクトをやっています。それぞれ違うプロジェクトで、何がどうつながっていくかはわからないです

けど、トヨタ財団が持つ「より良い社会を目指している人材プール」はかなり面白いですよ。

▼アシス 「多世代・多文化」「新しい文化の創造」というテーマと「オープン領域」という組み合わせは、よいやり方だと思います。あなたたちが重要だと考えていることと、草の根の現場から上がってくる「これが大事なんだ」という提案に対して、バランスを取る財団の柔軟性を示していますね。

▼吉川 例えば助成対象者のフェイスブックグループなんかだと、うまくいったことが投稿されますよね。元気付けられることもあるんですが、悩みとか大変だったことから学べることのほうが大きいと思っています。カンボジアではたくさん問題に直面します。そんなとき、他の人たちと情報交換すると、その問題に対する何か違うアプローチを見つけられるかもしれない。たまにこう思うんですよ。この問題で苦しんでいる、世界で私だけじゃない？みたいな、孤独感とか疎外感とか（笑）1人ではこの思考から抜け出せないから、お互いに他者から学ぶ、っていうのはすごく大事。

▼アシス まったく同感！プロジェクトは違うんだけど、お互いにつながっている部分があるっていう実感があります。

### 5

#### トヨタ財団の独自性

では、トヨタ財団の国際助成はどんな点がユニークだと思うか、聞かせてください。

▼アシス トヨタ財団は私たちを信頼してくれている、と感じます。例えば他の財団で

は会計ルールがものすごく厳格で、本来のプロジェクトではなく、助成金のけっこうな部分を外部監査に回さなきゃいけない、ということもあります。

▼寺田 例えばいくつかの財団は「有機農業」とか、「地域コミュニティ」とか、かなりフォーカスを絞っていますが、我々の活動って、何か特定のフィールドというフォーカスがあるわけではないんですよ。だからそこコミュニティにインパクトがある、と考えているんですが。APLAにとって、フィリピンと東ティモールのあいだでは共同プロジェクトをやったことはありましたが、ラオスも含める、というのは初めての試みで、多くを学びました。おかげでメチャクチャ大変でしたけど（笑）

今回のプロジェクトで、次世代の農家のために種をまきました。芽吹かせるためには水をあげることが重要です。そのためには常に関係を保ち続けることが必要。でないと、有機農業をやめてしまうかもしれない。助成プロジェクトは終わっても、現場は動いているんです。それから、「何がうまくいったかというインパクトについて報告書を書いて、領収書と一緒に送ってください」という連絡だけの財団もあります。だからトヨタ財団の人が東ティモールまで来ると聞いたときはかなり驚きましたが、すごく嬉しかったです。プロジェクトで何をやっているか、直接見てもらうことができました。これってすごいユニークなことだと思いますよ。

▼吉川 私は最初、財団の人はチェックリストか何かを持って、ひとつひとつチェックされるんだと思ってました（笑）でも実際は、一緒に現場を見て、いろんなアドバイスをいただきました。

▼山下 独自性というと、応募者に制限がない、という点かな。助成金はたいい組

織に対するもので、事業概要とか、過去 5 年間の実績とか、応募のときにいろいろ求められますよね。でもトヨタ財団はそういうのは必須ではない。そもそも助成金に関する覚書が組織ではなくて個人名。誰でも応募できるってことです。私の場合、知人で以前研究助成を得たことがあるフリーランスのジャーナリストがトヨタ財団への応募を勧めてくれたんです。それで事前相談にも行ったほうがいいよ、と言われて。財団側も事前相談を推奨しているので、歓迎してもらえました。

応募前の事前相談は必須ではないですが、よい企画書を書くために推奨しています。アイデアがよくても、ガイドラインに沿っていないものは採択できないので。吉川さんはどうやって国際助成プログラムについて知ったのでしょうか？

▼吉川 日本中のいろんな地域で仕事をしてきた友人から、トヨタ財団にはいい助成プログラムがあって、応募を考えている人の相談にも乗ってくれるよ、って以前から聞いていました。でも私、カンボジアで会社を経営してるんですよ。こういう助成金って、普通は非営利組織向けじゃないですか。でもその友人が、トヨタ財団の助成はもっとオープンだよ、と教えてくれて。

▼アシス そこはとてもユニークなところですね。民間セクターはイコール営利企業、というイメージがあるけど、実態は様々。

▼山下 トヨタ財団は組織ではなくて人を見て、もっと包括的に判断してる、って感じですよ。

▼吉川 ところで、得られたネットワークとか経験って、どうやって次世代に伝えるのがいいのかな。私たちだけに留めておくわけにはいかないよね。

## 交流プロジェクトは、成果や発見を外に見せるのが難しい。

▼山下 グローバル化して、比較的かんたんに外国に行ける世界で育ってきている下の世代の人は、情報の拡散とかについて、違う意見を持っているかも。

▼吉川 私のプロジェクトでも、国や地域を超えて知見を共有してきたけど、世代間のことを考えてデザインしなかったな。カンボジアでは、公権力を持つ人と、年長者と話をするのは難しいんだよね。ティーンの若者とかも巻き込めば、コミュニティの将来にとってキーになるかもしれない。

### 6

#### 交流の難しさ

次に助成を得る人へのアドバイスはありますか？

▼アシス とにかくビザは大変！日本大使館にビザ申請をしなければいけなかったんだけど、トヨタ財団の組織概要の書類の原本を求められました。以前は PDF でよかったのに、いつの間にか要件が変わっていたんですね。財団に急いでメールしましたよ。

▼吉川 私の場合はイタリアに行くことになっていたので、大変でした。シェムリアップに住んでるんですけど、カンボジアにはイタリア大使館がないんですよ。バンコクのイタリア大使館に全部の申請書を提出しなければいけなかった。トヨタ財団の助成で、と説明したんですが、書類を揃えるのが本当に大変で、ビザ発給はギリギリでした。

▼山下 私はトヨタ財団との覚書を証明として使っています。プロジェクトの代表者は、

海外に行くメンバー全員に対してよく説明して、かなり前もって準備しておいたほうがいいですよ。

最後に何かひとことずつ。

▼吉川 助成だけでなく、この対話のようなフォローアップは重要です。

▼寺田 交流プロジェクトは、成果を外に見せるのが難しいです。例えばプロジェクトに参加した人の表情がどれだけ変わっても、ドナーを含めて外の人には理解しづらい。

▼アシス この対話も含めて、相互交流と学び合い、というユニシアティブは有り難いです。トヨタ財団は助成先を対等なパートナーと捉えていると感じます。新しいアイデア、新しいアプローチ、次世代のリーダー育成につながると思います。

▼山下 何か新しいことをやれる機会を作ってもらえて、感謝しています。皆さんとこうして個人的に知り合うこともできて嬉しいです。

バギオでの対話プログラムにご参加いただき、ありがとうございました。我々から見れば、世の中になく新しい何かを生み出す取り組みにはリスクがありますが、それを恐れずに長期的な視点で助成を続けていければと思います。

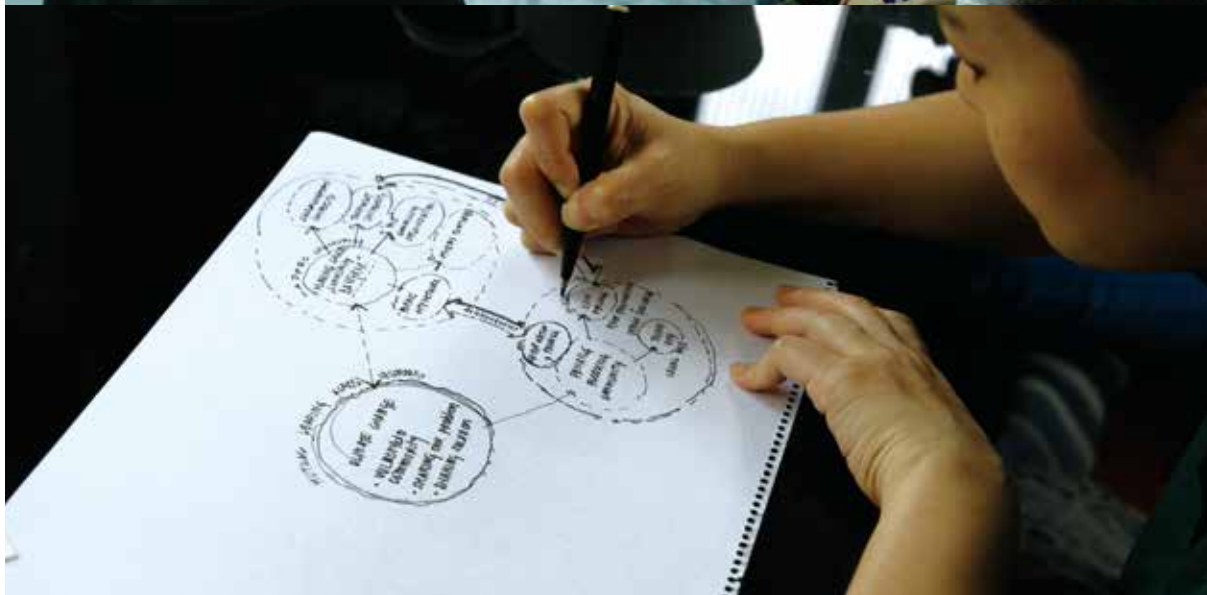




# タイ

vol.2

February 8-10, 2018







バンコクは東南アジア有数の大都市で、タイの全人口6,800万人の約4分の1が暮らしています。朝夕の通勤・通学の時間帯はこの車道も大混雑ですが、巨大なショッピングモールやデパートが立ち並ぶ主要な観光エリアでは、夕方以降になると若者や観光客で歩道がいっぱいになり、夜遅くまで賑やかです。一方で、電車やトゥクトゥクなどを使わなくても足を延ばせる範囲に、閑静な住宅街もあります。

バンコクは、市街地の大半がチャオプラヤー河下流部の低平地に位置するため、気候変動と都市化の進行に伴って、洪水による被害が深刻になっています。

都市部での洪水は交通の麻痺や住宅への被害など、人びとの暮らしに大きな影響を与えるため、対策が求められています。今回のダイアログで訪ねた、2017年度の助成対象者であるコッチャゴーン・ウォラアークさんのプロジェクトも洪水対策がテーマとなっています。彼女のチームは、対話と景観デザインによって気候変動に関する啓発活動や治水に関連して生じる地域の課題解決に取り組んでいます。

今回は2か所の活動現場を訪ねました。ひとつは、洪水対策として拡幅による立ち退きを迫られている運河沿いのコミュニティです。低所得者層が集住す

る住宅街の迷路のような小路を歩きながら、今後も住み続けるためのコミュニティのデザインや住民の間での合意形成のプロセス、予算等の課題について話をうかがいました。

ふたつめは、バンコクの中心地にある、彼女たちが景観デザインを手がけたチュラロンコン大学100周年記念公園です。平坦なバンコク中心部に人工的な傾斜をつくり、洪水調節機能を備えたこの公園は、人々の憩いの場にもなっており、バンコクが抱える、水をめぐるハード面・ソフト面両方の課題と対策の現場にふれる機会となりました。



## Members



コッチャゴーン・  
ウォラーコム  
2017年度助成対象者  
ポラスシティネットワーク  
創設者・CEO

ポラスシティ・ネットワーク創設者兼CEOであり、ランドスケープの分野から東南アジアの都市のレジリエンスを高めるため活動する。バンコクの中心部における環境配慮型都市公園等の景観デザインを手掛け、その実践は氾濫原や沿岸地域の気候変動に脆弱なコミュニティでの緑地空間整備にも及ぶ。



## 住民と創る洪水に強いまち

## 気候変動対策の好事例を探る

## —東南アジアにおける都市のレジリエンスの向上にむけて

主要都市が海面位に位置する東南アジアの都市では、気候変動の影響が深刻である。バンコク、ベナン、ジャカルタの各々の地域コミュニティとの対話を通じ、レジリエンスの向上にむけた解決策の共同デザインや知見共

有のためのワークショップ、ソーシャルメディア・プラットフォームの構築、デザイン・ガイドラインの作成と提言等をおこなう。これにより、気候変動に関する社会全体の意識向上と問題解決を促すことを目指す。



## 近現代建築の価値を次世代に

## アセアン5カ国における

## 「都市遺産の保全に関するリテラシー」の向上

アセアン各国の貴重な近現代建築や都市遺産・資産の多くは開発によって取り壊しの危機にある。都市遺産の重要性は現地で必ずしも認知されているわけではないため、とくに開発圧力が強いタイ、インドネシア、ベトナム、

カンボジア、ミャンマーの5カ国を対象に、市民と協同しながら現状の都市を認識したうえでその将来像を構想し、責任ある関与を果たすことで、都市遺産の保全に関するリテラシーの向上を目指す。



村松 伸  
2016年度助成対象者  
東京大学  
生産技術研究所教授

専門は建築・都市史。2001年にmAAN (modern Asian Architectural Network) を設立し、アジア諸国・各地域における建築・都市研究、国際会議、保全活動、建築教育等を展開。2009-14年、総合地球環境学研究所教授として、インドネシア・ジャカルタを中心にメガシティ研究を主導。『上海・都市と建築：一八四二-一九四九年』（PARCO出版、1991）他著作多数。





藤澤 忠盛  
2016年度助成対象者  
昭和女子大学生活科学部  
環境デザイン学科  
准教授

欧州での設計・デザイン活動後、産学官と連携し国内で多くの商品企画、デザイン開発、建築設計を行う。越後トリエンナーレ「大地の芸術祭」等の展覧会に出展。近年はカンボジアを中心にデザイン・アートに関するワークショップ・分野別横断研究を行う。2018年9月王立ブノンペン大学にて開催のアジアデザイン・アート展覧会代表として活動中。



### 独自の国際・学際ネットワーク構築

#### アジアの地域・風土性を生かした「デザイン・アート展覧会コンソーシアム」構想

アジアのデザイン・アートとその展覧会は、その独自性の強化と関連情報の一元化が課題である。調査分析やシンポジウムを行い新たなデザインの方向性を発見すると同時に、分野別横断研究による「アジアデザイン・ア

ト展覧会コンソーシアム（仮）」を構築し、カンボジアのブノンペンで第1回アジアデザイン・アートトリエンナーレを開催する。アジア全域で地域・風土性を生かしたデザイン・アートとその展覧会を活性化することを目指す。



### 「逝き方」から「生き方」を考える



古山 裕基  
2015年度助成対象者  
逝き方から、生き方を創る  
東北タイの旅主宰者

兵庫県尼崎市出身。タイ国ウドンタニ県在住。同国コンケン大学看護学部、京都文教大学文化人類学修士課程修了。日タイ両国で福祉・介護に携わり、2013年～2015年、京都大学東南アジア研究所：速水洋子教授主宰の日本学術振興会助成による「東南アジアにおけるケアの社会基盤」に参加。2017年から「逝き方から、生き方を創る東北タイの旅」を主宰する。

#### 心豊かな「死」をむかえる看取りの「場」づくり —日本国西宮市・尼崎市とタイ国コンケン県ウボンラット郡の 介護実践の学び合い

日本とタイの看取りの実践者が相互に現場を訪問し、こころ豊かな死を迎える看取りの場づくりについて学びあった。相互交流を通じて、日本でも生活のなかで死を語る場や、多世代が高齢者とともに老いを経験するイン

フォーマルな場をつくる議論が始まった。タイでは寺が死生観を語る場として機能しているが、日本での学びを機に終末期医療をふくめた機能的なケアを行う場にするための手始めとして、老人大学が始まった。



## vol.2 Dialogue in Bangkok

「Dialogue with Asian Neighbors」第2回目のプログラムは、  
多様な分野からの参加者を招いて、タイのバンコクで開催されました。

## 1

## 共感へのプロセスとは？

プロジェクトに多様な人を巻きこむとどんな良い影響があるでしょうか？ また、いろいろな層の人々の関心を引くためにどんな手法が有効でしょうか？

まず優れた教科書をつくること、そして次に様々なセクター、世代の人と一緒にワークショップを行うことが重要。直接コミュニケーションをすることです。

▼村松 伸 私たちの場合、インターネットやワークショップを通して普及活動をやっています。日本では毎年、学生たちを小学校に連れて行って、子ども向けプログラムをたくさん実施しています。今回ハノイでは、大学生を交えて活動しました。ジャカルタやヤンゴンでも同様です。ワークショップでは、近代建築の重要性について議論をしますが、そうすると“近代”の意味も文化によってばらばらだということがわかるんですよ。

▼古川 裕基 私のプロジェクトは終了してから約2年たちますが、今振り返ってみるとチームメンバー間の共感が不十分だったのではないかと感じています。実は助成が終わった後で初めて、なぜ自分がこのプロジェクトを始めたかという、個人的な思いを口に出して伝えられるようになったんです…きっかけは実の母の看取りでした。母が老いていくことへの私自身のネガティブな感情の動きを言葉にして周囲に伝えることは恥ずかしいと感じましたし、抵抗感がありました。でもそこを乗り越えて率直に告白して初めて、相手からも共感を持って受け止めてもらえたように思います。

プロジェクト期間中は、各々の経験や発見を立場を超えて共有するという点ではよい試みができたと考えていますが、それは裏を返せば、最後まで「立場」を離れた関係にはなれなかったということだったのかもしれない。医師は医師として、僧侶は僧侶として、プロジェクトに参画していました。

▼コッチャゴーン・ウォラアーコム 多様な人たちを巻きこむのは大きなアドバンテージだと思っています。私は自分が教えている

学生からも学ぶことがあります。例えば気候変動についてデザインを専攻する学生に教えるというのは、まだ確立されていない新しい知識で教科書ありません。近代建築も決して誰もが知る分野ではありませんから、学生のファシリテーションも同時に行っているということになりますね。

▼村松 コッチさんはジャカルタとベナンのパートナーはどうやって見つけたんですか？

▼コッチ 実はこの助成プログラムに応募したことが海外とネットワークを作る大きなきっかけでした。バンコクだけでなく東南アジアレベルまで専門性を広げたいと感じています。この助成のおかげでプロジェクトに生徒たちや地域の住民の方を巻きこむことができます。

▼古山 プロジェクトの終盤で、ファシリテーションの専門家の女性にコンタクトを取り、ワークショップの進行を依頼しました。彼女自身にとっては、「安らかな死に方」というトピックを扱うのは初めての経験だったのですが、これをきっかけにプロジェクト期間終了後もご自身の地元の尼崎で死を考えるワークショップを開き続けてくれているんです。そこでは、みなさん自由に、平等に、

死について語っています。これは全く想定していなかった副産物で私にとっては達成感を感じられるうれしい成果です。

このプロジェクトを実施する前は、死には「よい死」と「悪い死」があると思っていましたが、今は死に方へのこだわりはありません。いずれにしても私たちは死を迎えるわけですし、いつ・どこで・どうやって死ぬかを選ぶことはできませんから、生きている間に死について考え、語り合うことが最も大切なことだと今は感じています。

## 2

## プロジェクトがうまくいくとは？

プロジェクト終了後に起こる想定外の展開というのも、助成金がトリガーとなった成果の一つといえるのではないかと思います。我々はどういう視点でプログラムの長期的なインパクトを測ることができるでしょうか？

▼藤澤 忠盛 私のプロジェクトでは今年の9月にカンボジアのプノンペンで展示会を予定しています。これはトリエンナーレとして開催を続けていきたいと考えています。オリンピックのように立候補形式で持ち回りにしていきたいのですが、まず次回の会場としては東ティモールが有力です。カンボジアが初回ですからこの助成金がキックオフとして大いに役立っているということですね。





定量的な指標としてはウェブサイトへのアクセス数がわかりやすいのではないかと思います。プロジェクト終了までには2万を超えるアクセスを見込んでいます。

▼村松 長期的なインパクトという観点でいえば、私自身がトヨタ財団のプログラムの成果かもしれません。1980年代に私の先生が財団から助成を受けて、日本の近代建築の調査とアーカイブ化を始めたのですが、これが日本で近代遺産の価値が評価されるきっかけを作ったのではないかと思います。今は、自分が代表者としてプロジェクトをまとめる立場ですが、メンバーには多くの若手研究者や学生が含まれています。私の先生、私、私の生徒へと引き継がれてきているわけです。個人的にトヨタ財団にはとても感謝していますし、金額としてはそれほど大きなものではありませんが、とても重要なプログラムを行っていると思います。

いま言及されたような長期的なインパクトはどうやって測ることができるのでしょうか？研究分野では学術的な価値も評価の対象ですが、教育的な価値も同様に重要視されるものでしょうか？

▼村松 関係各国で育った研究者の数もひとつの指標になるのではないのでしょうか。人材は定量的・定性的両方のインパクトがあると思います。

私たちは活動を通して各国で近代建築の歴史を論文にまとめ、その保全のための政策にも貢献しています。信頼と尊敬を得ている活動ですし、若い後継者のために継続的にファンドが得られればと思っています。教育的なインパクトを測るのは難しいですね。イベントが終わっても私も参加者も楽しかった、という結果に達するのは簡単です

が、数値的な成果を聞かれると、例えば参加者を何人集めたか、何紙のメディアで取り上げられたかといったことをクリアしなくてはいけない。でもスポンサーが欲しいと思っている数字を出すことはある種のテクニックなので、そんなに難しいとは思いませんが。

▼コッチ その場で直接的に測れるインパクトばかりではないですよね。例えばワークショップに参加した人が自分のコミュニティに戻って何か始めるかもしれません。

▼村松 うまくいっているかどうかは、現場では手ごたえでわかるものだと思います。そこは難しい。方法として有効なものひとつは事前事後のアンケートやインタビューではないでしょうか。

プロジェクト期間中に行われたことを評価するのは大切なことですが、例えば期間後ある程度長期にわたってインタビューなどでフォローアップを行うとしたらいかがでしょうか？例えば、3年後、5年後、10年後というぐあいに。

▼コッチ とても重要なことだと思います。特に財団が成果を測りたいのであればやるべきですね。プロジェクトは長く続く旅のようなもので、私の運河のプロジェクトもこの先5年かかるかもしれないし、2年で終わるかもしれない。でも少なくともそのキックオフはトヨタ財団のプロジェクトとして始まっているわけですから、成果についてもトヨタ財団のプロジェクトの成果として部分的であれ当然認知されるべきだと思いますよ。

▼村松 近現代建築というのを長年やっているの、ネットワークとかパートナーはアジア各国にいます。いわゆる一般の方々はまだご存じないトピックかもしれませんが、近現代建築の重要性というのは、この2〜30年でだんだん理解を得られてきていると

思います。

最初のプロジェクトを始めたのは1988年頃です。東アジアの急速な経済成長の前ですね。とてもいい建築がたくさんあったのですが、その重要性というのは無視されていました。例えば上海で、我々が大事だと考えたいくつかの建築を選び出して、リスト化、データベース化しました。いま、それらの建築は国家の遺産ですよ。

▼コッチ 価値を理解するのに、建築家の役割は重要ですね。例えば市民教育に役立つような、わかりやすいガイドラインを作っていく、というやり方も考えられるのではないですか。

▼村松 学際的なプロジェクトを行う国立の研究機関にいたことがあります。専門家と一般の方々、地元のローカルなコミュニティとグローバルな状況を結びつける、ということをやります。

トヨタ財団に聞きたいのですが、同じようにアジアをカバーしているその研究機関と、どのように棲み分けますか？そこと比べると、トヨタ財団の助成はそこまで大きな規模ではありませんから、何かコラボするとか、やり方を考える必要があるのかな、と思います。

▼コッチ トヨタ財団はプロジェクトに投資するのか、人に投資するのか、をうかがいたいですね。トヨタ財団のフィロソフィーというか、考え方についてです。

プロジェクトというよりも人にフォーカスしているのであれば、説明はもうちょっと簡単かもしれません。でも「この人に投資するんだ」という考え方であれば、なんというか、より洗練された言い方がある気がします。

トヨタ財団が持つ東南アジアのネットワークはすごいですよね。しかもトピックが多様で、いろいろつなぎ合わせることでダイナミクス



を生んでいる。

トヨタ財団には、これから人と人とのつながりの部分をサポートしてもらいたいです。自分のプロジェクトが終わっても、他からインスパイアされるかもしれません。10年後、私からトヨタ財団にもう一回アプローチするかもしれませんよ。

### 3

#### マルチセクターの相互交流 というアプローチをどう支援するか

採択に至るのはプロジェクトを実施するスキルがあるから、というだけでなく、そのプロジェクトに先見性や可能性を感じるからです。マルチセクターの相互交流、というアプローチを支援していくのであれば、それについての知見をトヨタ財団もさらに蓄積していく必要があります。

▼村松 プロジェクトの開始前に、トヨタ財団が講師を呼んでトレーニングセッションを設ける、というのはどうですか。

#### 多様な文化のなかでのファシリテーションスキルの トレーニングは役立つと思います。

▼コッチ リーダーシップトレーニングとか？多様な文化のなかでのファシリテーションスキルを磨くトレーニングは役立つと思います。それに加えて、何か特殊なスキルも必要でしょう。例えば古山さんのプロジェクトは非常にスピリチュアルかつセンシティブなので、ソフトスキルが重要でしょうね。

▼藤澤 「死」は他人には触れたいテーマですが、古山さんがプロジェクトを進める上で、何か役立つやり方とかテクニックってありますか。

▼古山 プロジェクトを終えて感じたのですが、他のプロジェクトの方と一度議論すればよかったな、と。助成を受けるのが初めてだったこともありますし、プロジェクトをどう進めていけばいいのか、わからなかった部分があります。そういう機会がなかったので、このダイアログが僕にはとても重要なんです。

プロジェクトのどういう場面で、そういったスキルの重要性に気が付くのでしょうか？

▼コッチ 1年か2年の短いプロジェクトなので、最初にトレーニングをするのいいと思います。できれば中間地点でも、プロジェクトを振り返るセッションとして行うといいのでは。プロセスを振り返って何ができたかを考えてみると、より良いプロジェクトにできる



と思います。

それから、できるだけ早い段階で様々な人を巻き込むことの重要性も学んでいます。コラボレーションがプロジェクトの成功と、インパクトにつなげるための鍵ですね。この学びをプロジェクトにどうやって活かしていくかを考えています。他の方たちにも、これまでの学びをシェアしたいですね。ト

のが素晴らしいです。他のプロジェクトの方をもっとよく知りたい、と思っています。その点で「オープン領域」は、よいやり方ではないでしょうか。

▼藤澤 おっしゃるとおりですね。私の場合、準備している展覧会に、別の助成対象プロジェクトの方を招待しました。助成金贈呈式という場で出会えたことがきっかけですが、そういった横の関係が築けることは、大きなメリットだと思います。

▼コッチ (A領域の)高齢化のような特定トピックや、(B領域の)文化などに取り組んでいる方々にとって、ネットワーキングを推進することの重要性は明らかです。「オープン領域」については明らかとまでは言えないかも。ただ、この点はトヨタ財団の一番特徴的な部分です。歴史と気候変動とか、異なるトピックをつなげるための玄関口、というのかな。

シンプルに「トヨタ財団フォーラム」みたいなギャザリングをするのもいいと思います。気候変動と移民のトピックが結びついたり、アートと文化と高齢化が結びついたりする場になります。それも相互の学び合いです。あるトピックに特化しているわけではない、ということももっと前面に押し出したほうがいいですよ。「相互の学び合い」は、課題解決につながるものですし、そのインパクト

### 4

#### 人と人をつなぐをサポートする 「オープン領域」の重要性

「オープン領域」を設けているのは、財団だけでは気付けな課題もあるはずだ、という考えによるものです。プロジェクトから、こちらが学びたい、という姿勢でいます。

▼村松 ちょっと申し上げたいのは、20年前のトヨタ財団はとってもユニークだった、ということ。普通の人たちの、小さなプロジェクトに資金を出していた。多様性を尊ぶことがトヨタ財団のアイデンティティ、ということ

#### 多様性を尊ぶことがトヨタ財団のアイデンティティ

を示していた。他の様々な財団は、たいてい何かしらのトピックに特化しているでしょう。環境とか、技術とか。トヨタ財団はそうではなくて、非常に幅広いエリアをカバーしていて、歴史もあります。多様な人たちに助成する、ということが、独自性、アイデンティティではないですか。

▼コッチ 人と人との関係を築ける、という

をどう測っていくのか、アセスメントは重要ですね。

▼村松 古山さんのプロジェクトは実にユニークでしょう。トヨタ財団にとっても意味があるものではないですか。20年後にはものすごく大きなものになっているかもしれない。

▼古山 これはライフワークですね。社会



に何らかの変化を生み出すきっかけになると確信しています。

トヨタ財団としては、過去20年30年と前任者が築いてきた信頼感というか、レガシーのよいところを享受している、といえます。当時のプログラムで助成を受けた方たちのプロジェクトによる直接の成果というよりも、過去の助成対象者が助成を使って得た知見等をもとに各地で成長し、そのつながりが生きていて、我々が彼らに相談をするようなことがあります。

▼コッチ 3～4年後に私たちが何を成し遂げたか、あるいは成し遂げなかったか、ということもシェアできると思います。15年後だって大丈夫です（笑）

資金を出すだけでなく、他の方法でも人々のネットワークに投資することが大切です。国際的なプロジェクトをやろうと思ったのは、まさにそれが理由で、タイの中だけに閉じたくなかったんです。

今回皆さんとお互いによく知り合えたので、この先何か困ったときに相談できる相手が増えました。ただの友人関係、と言われるかもしれませんが、そうした関係が大事ですよ。

助成対象者同士がつながったり、新しい動きが生まれるのは我々も大歓迎です。

▼コッチ トヨタ財団のイニシアティブは重要です。財団側がきちんとネットワークを維持していれば、何年経っても他のことで貢献してくれると思います。

▼村松 トヨタ財団のネットワークのなかでは、助成を受けた側も自分たちのプロジェクトテーマに固執しすぎずに、オープンでいる必要がありますね。

## 5

### アジアで共有するもの

トヨタ財団の国際助成プログラムはアジアをターゲットにしている、皆さん、アジア的なものの見方のようなものをお持ちな気がします。

この対話セッションの締め括りとして、アジアの隣人として私たちは何を共有しているかについて、ご意見をください。

皆さんのことは最後までわかりませんでした。（略）  
この「わからないこと」に関心を持って  
学び続けることが大事なんでしょうね。

▼藤澤 僕らのプロジェクトでは、まずアジアのデザイン・アート・コンソーシアムというのを立ち上げ、それをベースに展覧会を開催します。第一回はカンボジアのプノンペンで、2018年9月を予定しています。西欧対アジアという単純な構図ではないと思いますが、デザイン・アートの世界では欧米がメインストリームなのは確かです。ヨーロッパ製の鞆がどうしてあんなに高いんでしょう？ブランドの力、でしょうか。よいデザインや、クオリティの高い製品はアジアにもたくさんあります。

僕らはまず、アジアではそういった製品がどうやって人々の目に留まっているのか、情報を集めてまとめて発信しようと思っています。たぶんそれが「デザイン・アートの世界のアジアの価値」みたいなものにつながるんじゃないかな、と。

まずは何よりもメンバー全員アジアが大好きです。We love Asia!ですよ。

▼村松 僕の場合、「アジア人」というとき

に「欧米人」に対してのもの、という意図はないですね。アフリカ、北米、南米という地域はありますが、ただ多様なだけ、です。日本がアジアをリードする、みたいな話がありますが、「なんで?」と思いますね。

▼コッチ 「アートは美術館で展示されるもの」という考えには少し違和感がありますね。アジアでは、いさよなくともバンコクでは、人々の生活と一緒にあるものです。「デ

ザイン・アート」の定義から議論しないといけないけど。

▼村松 正直言って、皆さんのことは最後までわかりませんでした。意味がなかった、ということではないですよ。専門や暮らしてきた文化、それに世代も異なる人たちとの対話は刺激的で、この「わからないこと」に関心を持って学び続けることが大事なんでしょうね。

このダイアログ企画全体を通して、理解を超えて共感をもたらすものは何か、という問いがあります。少なくとも私たちは違いがあることを認識して、何があるのかわかっているのか、というところに強い関心を持っている、と言えますね。

今回は皆さんにご参加にいただきありがとうございました。引き続き対話を続けていきましょう!



# 日本

vol.3

March 23-25, 2018







仙台は東北地方最大の都市であるとともに、“杜の都・仙台”といわれるように市街地においても緑豊かな場所として知られています。新幹線の発着を含む往来の要である仙台駅とその周辺は、オフィスビルから飲食・ショッピング・宿泊まで数多くの施設がそろい、平日の日中から休日の夜まで、人びとの日常生活と余暇にとって欠かせない場所のようです。2011年3月11日の東日本大震災は、そのような賑やかな場所である仙台市においても大きな被害をもたらしました。

5つの区からなる仙台市のうち、沿岸部に面する2つの区では、7年が経った現在でも、その爪痕を残しています。今回の仙台でのダイアログでは、2017年度助成

対象者のひとりである渡辺裕一さんのプロジェクトメンバー、門脇篤さんにご案内いただきました。

今回のダイアログ実施期間と同じタイミングで来日していたアチェ（インドネシア）のプロジェクトメンバー3名を含む参加者は、現代アーティストである門脇さんが仙台にて取り組んでいる活動の現場とその関連施設を訪れました。

アートを通じて、障害をもつ方々の社会への参加を支援する団体「(一社)アート・インクルージョン」のアトリエ、あすと長町の復興公営住宅での「おしるこカフェ」です。前者では、心身に不自由や不安のある方々がアーティストとして作品の制作などに取り組んでおり、後者は、毎月1回この復興公営住宅とその近隣に住まう方々で

ランチをつくり食卓を囲むことで、人びとのあいだのつながりを大切にする活動です。

また、ほかには、震災遺構仙台市立荒浜小学校とせんだい3.11メモリアル交流館も訪れ、それぞれ地元のガイドの方々から震災時の様子や現在の人びとの暮らし、市の取り組みについてお話を伺いました。

アート・インクルージョンのアトリエと「おしるこカフェ」にて、トヨタ財団の担当プログラム・オフィサーも含め、参加者全員で地域のみなさんとの共同作業を体験した後におこなった議論では、各プロジェクトでの経験やこれからの展望、国際助成プログラムの特徴や今後に向けたリクエストなどを話し合いました。





## アートがつなぐ被災地の記憶

コミュニティアートが被災地ツーリズムの新局面を提示する  
日本とインドネシア・アチェの協働プロジェクト

日本とインドネシア・アチェでは、被災経験の伝承が共通の課題である。東日本大震災後の日本では被災地ツーリズムについて手探りの段階である一方、震災から12年半が経つアチェでは防災意識の低下が進んでおり、新たな伝承の形が求められている。そこで今回、コミュニティアートの手法を用い、震災の記憶を共有し次世代へ伝承していく、サステナブルな被災地ツーリズムの可能性を拓くことを目指す。



渡辺 裕一  
2017年度助成対象者  
(特活)地球対話ラボ  
理事・事務局長

埼玉大学教養学部文化人類学コース卒。映像作家。2002年「日本とアフガン高校生テレビ電話対話事業」から対話や双方向映像の可能性を追求。東日本大震災以降は被災地の情報交流の支援に取り組んでいる。アチェには、2004年スマトラ沖地震直後に取材に入り、中央政府との内戦を終結させた津波や、負の被災体験がプラスに転じる「発信」についての映像記録を続けている。



門脇 篤  
一般社団法人  
まちとアート研究所  
現代アーティスト

東京外国語大学アラビア語学科卒。2003年に仙台の商店街を会場にした「観光とアート展」に参加以後、コミュニケーションとしてのアートの可能性を追求。全国各地のコミュニティでアート企画に携わる。東日本大震災後は、震災の伝承とコミュニティ再生の取り組み（「おしるこカフェ」「石巻日日こども新聞」など）や、同じく被災地である東北とアチェを結ぶ取り組みを行っている。



中川 真規子  
(特活)地球対話ラボ  
理事

文教大学大学院国際協力学専攻科修了。2013年4月～2016年3月までタイの在外教育施設（日本人学校）で教諭として勤務。社会科副読本『わたしたちのシラチャ』製作。2016年5月から地球対話ラボ理事、2016年6月からフィリピンの現地旅行会社勤務。いわゆる「観光」では訪れないような離島地域へのスタディツアー、ローカルの人々と日本人の国際交流や学びの場づくりを行う。



森 透  
(特活)地球対話ラボ  
理事

早稲田大学第一文学部卒。1991年、森透事務所開設。広報、社史などの執筆を生業とする。1989年から村井吉敬氏（『エビと日本人』など）たちとともにアジアの人々の目から日本の援助を見つめ、社会に報告する活動に加わる。1992年から「ラオスの子供に絵本を送る会」に参加、次いで2002年より地球対話プロジェクト（現・地球対話ラボ）に参加。日本子どもNPOセンターで『子どもNPO白書2015』の制作に携わる。



小川 忠  
跡見学園女子大学  
文学部 教授

兵庫県神戸市出身。1982年早稲田大学教育学部卒業、2012年に同大学大学院アジア太平洋研究科博士号（学術）を取得。1982年から2017年、国際交流基金に勤務。この間、国内では日米センター事務局長、日本研究・知的交流部長、企画部長、

海外ではニューデリー事務所長、東南アジア総局長などを歴任。2017年4月より現職。著書に『インドネシア イスラーム大国の変貌』（新潮選書）、『戦後米国の沖縄文化戦略』（岩波書店）、『原理主義とは何か』（講談社現代新書）他。



## アジア型「オーガニック」の推進



北川 智子  
2017年度助成対象者  
(特活)クロスフィールズ  
プロジェクトマネージャー

幼少時代をドイツとイギリスで過ごし、国際基督教大学教養学部卒業。2011年から日本放送協会（NHK）で番組ディレクターを務める。2016年5月NPO法人クロスフィールズに加入。現在、日本企業で働く人材を新興国のNPO等に派遣する「留職プログラム」や「ワークショップ」などを担当している。

## アジア地域における持続可能な有機農業の 実践に向けた仕組みの構築

### ー日本・フィリピン・ベトナムの現場から

アジア各国での有機農業に対する関心が高まっている一方で、その実践の広がりは欧米に比べまだ十分ではない。そこでまず、日本、フィリピン、ベトナムの三か国を対象として、有機農業に携わる様々なステークホルダーの多様な交流、及びアジア各国の課題の相互理解とグッドプラクティスの学び合いを促進する。同時に、社会課題の解決に重要な役割を担う社会的企業の事業や組織の強化を目指す。

## 日中韓における遺伝資源と関連する伝統的知識の 活用と保全のための「東アジア・共感モデルの 構築ー伝統野菜と養蜂を題材として

薬、食品、化粧品等に应用される遺伝資源とそれに関わる伝統知について、その提供国と利用国の間に対立が生じている現在、セクター、国、世代等の垣根を越えて連携する活動が求められている。そこで今回、遺伝資源として注目されている伝統野菜および養蜂を題材に、日本、韓国、中国の間で、栽培・調理に関する知識の学びあいと体験を通じた文化理解を推進し、つながりの強化による「東アジア・共感モデル」の発信を行う。



内山 愉太  
2017年度助成対象者  
東北大学大学院  
環境科学研究科 助教

千葉大学大学院工学研究科修了。博士（工学）。専門は都市・地域計画、地理情報学。大学院修了後は、総合地球環境学研究所、金沢大学人間社会研究域を経て現職。現在、アジア太平洋地域の生物多様性、生態系サービスの評価等に携わっている。共著に『農林漁業の産地ブランド戦略』、『人としくみの農業』など。

## 食と農から始める「知」の保全活用



## 小水力エネルギーを活用した「コミュニティ協同組合」の構築 ーインドネシア・西ジャワ州と宮崎県五ヶ瀬町での人的交流を通じて

### 自然エネルギーが生み出す 学びの場



自然エネルギーを地域の力で活用するための実践を形成するには、住民の意識と力を未来に向けて結集することが重要である。今回、五ヶ瀬自然エネルギー研究所（宮崎県五ヶ瀬町）の住民は、インドネシアのキンチール（＝地域住民によるハンドメイドの小水力発電）の製作経験を通じて、インドネシアの「無電化村」で継承されてきた技術を習得した。一方、五ヶ瀬村では地域住民と様々な国からの留学生の参加を得て、キンチール・ワークショップを開催した。結果、地域の自然が生む「良い電気」の活用を考えるインスピレーションが生まれ、人口減少・高齢化下の持続的な地域生存戦略を考える学習の場と主体が形成された。



藤本 穰彦  
2014年度助成対象者  
静岡大学農学部  
准教授

同志社大学大学院社会学研究科博士前期課程修了。島根県中山間地域研究センター、JST 社会技術研究開発センター、九州大学工学研究院を経て、2014年10月に静岡大学へ着任。2013年7月『自然エネルギー社会資本整備のための地域主体形成に関する研究』で工学博士（九州大学・論博）。日本で最も美しい村連合資格委員。

## vol.3 Dialogue in Sendai

バギオ、バンコクに続く仙台でのダイアログは、新旧の助成対象者や有識者を迎え、

(一社)アート・インクルージョンのアトリエで開催されました。

## 1

## 文化・アート・他者と協働すること

皆さんの助成プロジェクトはそれぞれ「コミュニティアート」「有機農業」「伝統野菜」「自然エネルギー」と、取り組む活動のテーマは異なるものの、いずれも私たちが暮らすアジアの中で重要な課題と言えると思います。

技術は単体で入っていくものではない。  
その土地の人たちの価値観や文化とセットで根づいていく

▼小川 忠 今回参加した皆さんのプロジェクトに共通したキーワードとして「文化」が挙げられると思います。渡辺さんたちは、特に「双方向性」を取り上げ、コミュニティアートを通じて、違いを乗り越えていく試みです。

北川さんたちが取り組む有機農業というの、文化と関係が出てくるのではないですか。個々の社会の文化的状況をよく知ることが必要で、今後の展開を考えると、文化がひとつのブレイクスルーになる気がします。内山さんたちの日中韓での伝統野菜のプロジェクトでは、好きという気持ちと共感を作っていくことが重要でしょう。

藤本さんの小水力発電のプロジェクトは技術の話に聞こえますが、その背景にあるのは地域の思想や価値観ですね。日本が学

ぶ、あるいは協力して一緒に行く、という点は、日本が一方向的に支援する、というこれまでのステレオタイプと違い、興味深いものです。

▼藤本 積彦 私が助成を受けたのは 2014 年度でしたので、いまの国際助成の枠組みとは少し異なりますが、バンドンの人たちと交流し、彼らの小水力発電の取り組みを宮崎県の五ヶ瀬町でもできるように、というの

が、トヨタ財団のプロジェクトでした。バンドンへの技術移転は 1990 年代からドイツが行ったものですが、ある 1 つのタイプのものしか残りませんでした。それにはいろいろな理由があったと思いますが、ひとつ言えることは、技術は単体で入っていくのではなく、生活のニーズと、その土地の人たちの考え方や文化、風土といったものとセットで根づいていく、とうことではないでしょうか。

▼門脇 篤 私は様々な人たちとアート活動を行っています。表現活動は、何か面白いことを、何らかのかたちに加工し、マスコミに消費されるものではないかたちで人に伝えられる、ということです。名づけることは難しいのですが、その在り方が創造的であるならば、それがアートだと思います。「人

に伝わる」ことはエネルギーになります。それができる場を作り、その場に誰かが入る、ということがアートだと思ったのです。

毎月一度、あすと長町の復興住宅で行っている「おしるこカフェ」も、極論すればみんなで料理を作って食べているだけなのですが、これもアート活動。お母さんたちが知恵を結集し創造的な場が生まれていると言えるのではないのでしょうか。

▼北川 智子 有機農業に対する意識はそれぞれの国で違いますが、どこかで共通の課題が浮かび上がってきます。対話と交流でそのプロセスを共有して、一緒に考えるコミュニティが生まれる、というところをサポートするのがトヨタ財団国際助成プログラムだと思います。

課題解決は個別にやったほうが早い、ということもあるかもしれませんが、一緒に考える、ということが、引き出しを多くするという意味で、彼らにとっていいことだと思っています。

▼小川 「交流」を考えたときに、生身の人間が直接行き来するのではなく、スカイプ等を通じてでもできる、という意見もありますが、皆さんはいかがですか。

▼渡辺 裕一 もちろん直接の交流がいいと思いますが、中学生・高校生くらいになれば実際に行けても、小さい子どもたちは行くことが難しかったりします。資金の問題もありますし、例えば紛争地など、それができない場所もあります。これらを組み合わせで行く、というのが一番よいでしょう。例えば、一度行ったあと、その後もスカイプでやり取りする、というやり方もあります。

▼森 透 正面で向き合うことに恐怖感があるという人もいます。子どもであれば、クラスメイトなど大勢の人たちと一緒に、画面の向こうの人たちと喋るほうが、気が楽でいいかもしれません。スカイプで話したあとに、お互いの国のことをもっと知りたい、という意見が出てきます。交流すると、遠く離れたところにいっても、近いと思えるんですね。こうした交流を経験した若い人たちが、将来、本当に日本に行ったりすることがあればよいかな、と思います。







## 2

### 「思ってもみなかったこと」 が起こるのがプロジェクト

プロジェクト開始前には予想してなかったことや、困難にぶつかったことなどはありますか？

### 「つなぐ人」を見つけ、育てることが重要

▼藤本 思ってもみなかったことが起こったのがトヨタ財団の助成を得たプロジェクトでした。五ヶ瀬町の木工や土木に携わる職人にも、実際にインドネシアに行ってもらったんですね。そこで現地の職人たちと一緒に木を切り、水車をつくり、電気を起こした。衝撃的な経験だったらしいです。そうした刺激による新しい発見が、このプロジェクトにはありました。

技術は一足飛びには発展しないんです。自分たちで試行錯誤して、自分たちができることから始め、自分たちのところに合ったものが残り、成長していく。何よりもまずは、自分たちでやってみる、ということが必要でした。

五ヶ瀬町の職人たちは、インドネシアで学んだことを活かして、帰国後に自分たちの町で手に入る材料で小水力発電に必要な機材を作り、実際に発電し、いまは九州各地の学校へ技術を伝えに行っています。

企画書に書いたことをスケジュール通りにつづがなくなりました、というより、思ってもみなかったことが起こった、ということのほうが面白いし、財団側としても嬉しいですね。そうした体験をポジティブに評価すべく、国際助成プログラムでは、プロジェクト全体の報告書に加えて、自由度の高い記述式で

個々のメンバーに作成いただく「変化の記録」という書類も、半年ごとに提出していただいています。

▼渡辺 困難と言えば、資金の問題の他、人が続いていかない、という問題もあります。我々はずっとアチェに留まってくれるであろう人に絞って担い手を作っていく、

と取り組んでいます。日本に招聘してたくさんの方を学んだ青年が、優秀であるがゆえに、次のステップで海外などに行ってしまうこともあります。そうすると担い手が一時的とはいえ不在になってしまう。

ただ、アチェ人は、自分の故郷をととても大事に思っていて、海外に出てもいずれ戻りたいと思っているんですね。そのときにまた一緒に何かしたいな、とは思いますが。

▼北川 私たちのプロジェクトでは、各国リーダーがかなりコミットしてくれているので、幸いそこにブレはないですね。担い手に関しては、サブのメンバーが変わっていく、ということはありません。

▼藤本 代表者の下に若いメンバーが入って事務局を担って頂きました。プロジェクトが始まる頃に地元の五ヶ瀬町に U ターンされた方で、英語も得意だったんです。また唯一タバコが吸えた日本側のメンバーだったので、インドネシアの村人たちとタバコ仲間になって距離を縮められるという意味でも貴重でした。インドネシアでは、男性はタバコを吸えればすぐに打ち解けられます。彼の名前だけはすぐに覚えられていました(笑)

▼小川 話を聞いていて感じたのは、「つなぐ人」の役割。その候補生を見つけ、育

てることの重要性です。一方、そういった人たちとの付き合い方で難しい点もあります。特定の人とのあいだで関係がマンネリ化してしまうことや、その社会のなかの人間関係などを変えてしまう危険性もあります。関わり方や距離感を考えないといけません。

▼門脇 優秀な人の流出というのは、高齢化や過疎化といった、日本全体にとっての課題とも関連していますね。ここ（アート・インクルージョン）でやっていることは、震災復興の一環でもあります。そうした課題にここでの知見が活かされる、つまり課題は違っても、知見が共有されるということに重要性があるのではと思います。

かつて、日本各地のアート関係者への助成を受けた人たちが、年に3回必ず集まって会議をしていたことがあります。一つひとつは独立したアートプロジェクトでしたが、まさにお互いの経験を共有する場でした。この助成プログラムは終わってしまいましたが、そこで生まれたつながりは継続しています。

▼小川 各助成の分野は違うけれど、全体的には、目指しているところは同じである、という人たちはたくさんいます。それをつなぐというのは、財団のひとつの役割ですね。そのために、短期的な成果や数値化を求める基金や財団が多いなかで、日本を代表する企業財団であるトヨタ財団には、長期的な、すぐには目に見えないものに対してお金を出し続ける、ということをしつかりと続けて欲しいですね。

▼中川 真規子 違いのなかから生まれる共感は大切だと思っています。理事として関わっている地球対話ラボは、離れている人たちとどのようにコミュニケーションをとる



か、という点に力を入れています。アートでいえば、展覧会の来場者などは数字にできますが、対話や人との交流での生の体験をすぐに数値化することはできません。一人ひとりのなかの国や分野の違いのなかで、結び付いて、学びあい、それぞれの人のなかに残っていくことの価値をどう捉えるか、ということを考えたいです。

▼北川 あるコミュニティで、何が起こるかはわからない、という状況にお金を出してもらえるのはありがたいです。事業化するかどうかを決める前に、やってみたいことをやってみることができる機会になっています。一方で、助成金をもらえて初めてプログラムが動く状況であることは事実です。結果がすぐに見えるものにお金を出したい、という人たちに、どうやってお金をつけていただけのかを考えて、もう少し長期的なプランをも持ってやっていくことが重要ですね。もつといろいろな人を巻き込みたいと思っても、資金面で呼べないことがあるので。

▼内山 榊太 プロジェクトを通じてどういう問題を解決するのか、という点がよく注目されますが、同時にある種の価値を見出していく、作っていくというのが大切だと思います。ただ、まだその重要性が認識されてないというのが今の課題ですね。

我々のプロジェクトは課題解決型でありつつ、かつ価値創造型でもあります。まだ先が見えていない状況を含めて、不確かな状況だが長期的なビジョンを持っている、というところを支援してもらえるのがトヨタ財団の助成だと思います。

研究への支援、例えば科研費だと、ある学術分野への貢献を問われます。また、ある程度成果が出ているものに対してお金がつきます。

他方、科研費も、挑戦的萌芽研究といった面白い枠組みができたり、民間のような柔軟な支援も行っている印象があります。

▼内山 とはいえ、自分が目を向けてないもの、考えてもいなかったものに目を向けられる、というのは、科研費での研究ではなかなか難しいかもしれませんね。

### 3

#### POとのコミュニケーション

トヨタ財団の国際助成プログラムでは、応募に先立って事前相談をお勧めする旨を募集要項にも明記しています。この対話プログラムに参加していただいた皆さんのプロジェクトも、事前相談を受け、何らかのサジェスチョンをしました。

▼渡辺 わたしたちの場合は、募集要項を見て、ひとまず財団に相談に行ってみようか、ということになりました。そこで、他の財団等と比べても、最も具体的なサジェスチョンをいただきました。良い点も悪い点も率直に言ってくれたことがありがたかったです。少し怖かったです（笑）

他方、なぜ我々の提案が通ったのか、という点はいまだにわかりません。選考の際のポイントや点数のようなものがあれば、次に他の財団へ応募する際に参考になるので、教えていただけると嬉しいのですが。

各財団の各プログラムによって重視される点は異なりますし、選考には委員の個性や考え方が大きく影響します。トヨタ財団のそのときの選考委員がいいと思っても、他財団でよい評価になるとは限りません。ただ採択されている以上、その年の募集要項の趣旨に合っていたということは言えます。

▼小川 経験から言うと、選考というのは客

観的に見えて実はとても主観的なものです。人によって点数が変わるし、委員の間での議論によって、その主観すらも変わっていきます。

他に誰も推さなくて、一人の委員だけが強烈に推したものが、結果的にとても良いプロジェクトに化けたりすることもありますね。

▼藤本 財団側の質問や要請に素直に答えていく、ということが何より重要だと思います。企画書の質問項目に、まさに助成側が知りたい項目が書いてあるわけですから。そして、採択後もコミュニケーションを取り、フィードバック等のやり取りを面白がってもらえるような関係でいることが大切ではないでしょうか。

ちなみに、我々が助成をいただいたプロジェクトでは、もともと1年とか2年といった短期的なインパクトは重視せず、今後につながるような仕掛けを作る、ということもさせてもらいましたが、たとえ20～30年の長期スパンで考えているプロジェクトでも、申請書には短期で目に見える成果も書くよう心掛けました。それが全くないプロジェクトは、やはり魅力的には映らないでしょう。

財団プログラムオフィサー（PO）は、国際助成の枠組みで今どのようなものが求められているのか毎年調査を行い、プログラムを少しずつ変えていますし、何年かに1度はがらりと変わります。応募を検討している方々にはぜひ遠慮なくPOとコミュニケーションを取っていただきたいと思います。

### 4

#### 共感の場づくりに向けて

今回のダイアログでは、敢えて異なる分野の方々にお集まりいただきました。



## 新しい見方、レンズを得られた気がします。

▼中川 この対話プログラムでの現場訪問や、それぞれ違うプロジェクトを実施している皆さんの話を聞いて、同じように感じることもあれば、異なる点を知って自分の視点がずれていくこと、そしてそこから生まれることがあると思いました。

▼北川 前職でメディアにいたときに震災後の仙台に来ました。その時とどれほど変わったか、というのを客観的に見ただけでなく、アチエの方々とも地震や津波、そこから復興に関して異なる点や共通点を話し、共感できたことが今回とても印象的でした。同じトヨタ財団からの助成を受けながら、皆さんそれぞれ違うプロジェクトをやっていますが、先にプロジェクトを終えた方々からの話も聞き、自分たちのプロジェクトの展望も見えてきた気がします。

▼内山 この対話プログラムに参加する前は想像できなかったんですが、自分とバックグラウンドが違う人たちと経験を共有して、自分がこれまで目を向けてこなかったものに目が向けられたと思います。自分のプロジェクトに対しても、新しい見方、レンズを得られた気がします。他のメンバーともこの経験を共有したいと思います。

▼藤本 門脇さんが行っている障害を持つ方とのアート活動に参加していたときに、お互いに信頼される仲間であるという環境は、

とてもありがたい豊かな空間だと感じました。対話は、窮屈にしてしまうと正義の議論になりがちですが、多様な人がいて、それに参加できない人たちもいます。

対話と同時に想像力を育み共有することで、こんなに豊かな場が立ち現れるのかと感動しました。

▼小川 共感のネットワークのようなもので地域同士がつながっていきける、ということを確認しました。いまシャリーアを取り入れようとしているようなインドネシアから、今回の3人が来てくれて、この場を共にしてくれたことはとてもよかったです。

世界の足並みが揃わず、保護主義の流れがあるなかで、いま日本が国際協調についてどんな役割が果たせるかという、とても大切な時期にあります。この大切な時期にあって、ひとつの日本の顔だからこそ、トヨタ財団には国際協調を後退させない明確なメッセージを出していただきたいと感じています。

それから、トヨタ財団は助成した側から親しみを持たれていると感じました。これもPOとの間のコミュニケーションによるものですが、この関係はお互いにもう少し活用できそうですね。

助成対象者の方々とは随時コミュニケーションを行い、プロジェクトでフィールドワークや

シンポジウムがあるときはできるだけ足を運ぶようにしています。

また贈呈式の翌日に、全助成対象者にお越しいただいてワークショップを実施したり、フェイスブックで年度ごとに助成対象者専用のグループページを作ったり、ということはしています。年度をまたいだ助成対象者の交流は今後の課題ですね。

▼藤本 トヨタ財団に限らず、資金の出し手の方々には、プロジェクトの終了後も、どうなっているかを気にかけてもらいたいという思いを持っています。かつていただいた助成が元になって、今こんな変化が生まれている、ということプロジェクト側は伝えたいのです。その意味で、助成が終了して何年も経ってから、今回のような機会に声をかけてもらえたことは、とても嬉しかったです。食事の場ひとつを共有することでもいいかもしれません。テーマを抱えて動いている人が集えば、その場で新しいアイデアが出て、参加して、新しいプロジェクトが動いていく、ということもあるでしょう。

今回の対話を通してトヨタ財団もよいフィードバックをいただくことができました。こうした助成を受けた方々同士のつながりを作る取り組みを継続的に作っていければと思います。ありがとうございました。



## トヨタ財団からのメッセージ



選考委員長  
学習院大学国際社会科学部 教授

### 末廣 昭

トヨタ財団は 1974年の設立以来、アジア地域で40年以上にわたり助成活動を行ってきました。その設立趣意書には、「世界的視野に立ち、しかも長期的かつ幅広く社会活動に寄与するため、生活・自然環境、社会福祉、教育文化等の多領域にわたって時代の要請に対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対して助成を行う」ことが謳われています。

助成財団は、自らが掲げた理念や哲学を、助成プログラムを通じて実現し、豊かな社会づくりに貢献することが求められています。トヨタ財団では、設立以来、専任のプログラムオフィサーを配置し、彼らが助成プログラムを組み立て、助成プロジェクトと社会の橋渡しを行ってきました。今回の3回に及ぶダイアログシリーズも、プログラムオフィサーが直接助成対象者と面談し、プロジェクトを通して得たものや参加者の特性、彼らの率直な思いなどを、国、分野、立場を越えて共有する試みとなっています。

学術の世界では、調査・研究から導き出された結論を提示し、場合によっては提言を行うことがゴールとなります。トヨタ財団の助成プロジェクトでは、そこからもう1サイクル、失敗の検証も含めて実践していき、社会と関わりながら課題解決に取り組み、新たな価値を生み出すことを目指しています。果敢に難しい課題に取り組んだ結果として失敗できる、あるいは敗者復活があるということも、民間助成の大切な要素ではないでしょうか。

さらに、ダイアログの中でも言及があるように、短期的な視野に立った費用対効果の追求ではなく、社会貢献と長い時間軸という2つの尺度を使って事業の成果を測る必要があると考えます。立派なプロジェクトを展開しているグループから、「じつは、10年前のトヨタ財団のプロジェクトがきっかけだった」と言われることもあるからです。すぐには形の見えない活動をいかにサポートしていくか。そこにこそ、財団としての力量が問われているとも言えます。

国際助成プログラムでは、2016年度からプロジェクトのテーマを特定しない「オープン領域」を設けることにしました。また、2018年度からは、プロジェクトに求められる要素として、「国際性」「越境性」「双方向性」「先見性」というキーワードを示し、メンバーの編成や課題へのアプローチに一層の重点を置くことにしました。技術や知識の体系が複雑になり、専門分化が進むなかで、そうした専門の枠を越え、横断し、さらにはつなげていく自由で斬新なアイデアを受け入れることが、今の助成財団には重要だと考えるからです。

「交流」「学び合い」といった要素を中核にすえ、分野を限定しない助成を続け、具体的な事例を積み重ねていくことで、「トヨタ財団らしさ(The Toyota Foundation Way)」が見えてくるのではないかと期待します。





### 楠田 健太

国際助成プログラムでは、従来の「支える／支えられる」「教える／教えられる」といった一方向の関係ではなく、双方向的な学びのプロセスの中で、協働・共創の関係を構築するような企画を求める旨を要項にも明記していますが、実はこれは財団と助成対象者との関係にも当てはまります。すなわち「助成する／される」という味気ない関係ではなく、共通の課題に取り組む対等なパートナーとして助成対象者の皆さんと関わっていきたくと担当者は考えているのです。その意味でこのダイアログは、プログラムの思想が形となってできた一つの成果であると自負しています。こちらからの度重なる無茶なお願いに快く応えていただき、実り多い時間を提供して下さった全ての参加者の皆さんに感謝したいと思います。



### 前川 智美

現場の人の往来を通じた学びあいをもつ、挑戦的な精神と期待感、やりがい、そして不確かさと迷いなど、本来プロジェクトに携わるなかでしか経験できないことがらに、このダイアログを通じて少しだけ触れることができたように感じています。現場におじゃまし、時間と場所を共有しながら実施した今回のダイアログは、ご参加いただいた方々と現地の関係者のみなさまのご協力により、とても楽しい場になりました。ご一緒くださったみなさま、誠にありがとうございました。個々のプロジェクトのなかにある多様性が、プロジェクトどうしの交流・学びあいを通じてさらなる新しい発見と展開をもたらす可能性が垣間見えた、素晴らしい機会でした。



### 笹川 みちる

助成プログラムのめざすところを言葉にするとどうしても抽象的な概念が先に立ってしまいます。セクターを越えた協働、経験の共有、直接交流を要件とする国際助成プログラムの各プロジェクトの現場で実際どのようなことが起こっているのか、今回のダイアログを通じてより具体的に臨場感をもって描き出すことができたのではないかと思います。私たちが大切に考えている方法論や、失敗・衝突も含めた変化とその価値を今回の企画を通じて、多くの皆さんに共有いただければうれしく思います。



### 利根 英夫

ある課題に取り組むにあたって、他者と協働することは不可欠です。言語、文化、組織等の違いを超えて、100%お互いを理解するのは不可能かもしれません。それでもお互いを理解し、共感を育むための努力を続けるための場と機会設定を助成という形で後押しすることが出来る、という思いでした。

## トヨタ財団について

トヨタ財団は、トヨタ自動車によって1974年に設立された助成財団です。

世界的な視野に立ち、長期的かつ幅広く社会活動に寄与するため、生活・自然環境、社会福祉、教育文化などの領域にわたって時代のニーズに対応した課題をとりあげ、その研究ならびに事業に対して助成を行っています。



## トヨタ財団国際助成プログラムについて

2013年からトヨタ財団の国際助成プログラムは「アジアの共通課題」をテーマに掲げています。当初、高齢化、人の移動、そして再生可能エネルギーという3分野に対する研究と活動への助成を行うなかで、地域コミュニティにおける諸課題を理解するためには文化的な側面の理解も不可欠であるという認識を得ました。また、国境やセクターを超えた相互交流と学びあいというアプローチは、さまざまな「アジアの共通課題」に対する取り組みに対して有用であろうという考えのもと、2016年にプログラムを大幅に見直しました。

その結果、現在の国際助成プログラムは、相互交流と学びあいを通して、プロジェクトメンバーや対象となった地域にポジティブな変化を生み出すことを目的とするプログラムとなっています。

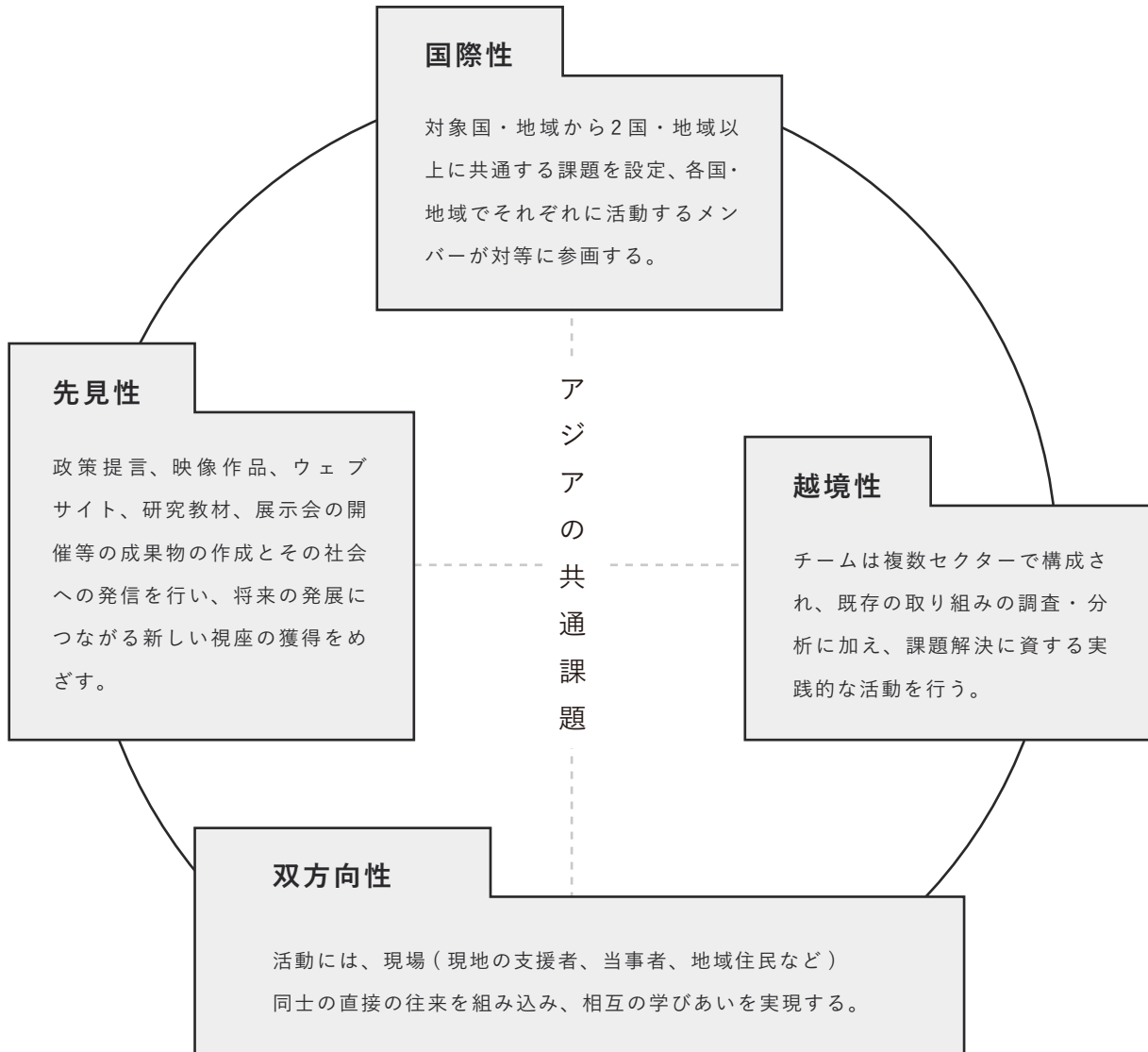
現在、そして将来の世界の課題は要素が複雑に絡み合っており、解決へ向けたヒントを見つけ出すには、さまざまな主体による協働・共創が必要です。本助成プログラムが、互いの隣国である東アジアと東南アジアのリーダーたちを有機的に結びつけ、所期の目的が達成されることを願ってやみません。



## 応募をご検討の方へ

国際助成プログラムは、アジアの共通課題に取り組むプロジェクトを助成します。

国をまたいだ多様なバックグラウンドをもつ参加者たちが、従来の「支える／支えられる」「教える／教えられる」といった一方の関係ではなく、同じ課題に取り組む仲間として「共に考え、行動し、創りあげる」という協働・共創の関係を構築し、その関係が国籍、年齢、所属組織等の枠を超えた双方向の学びのプロセスのなかで、社会変革につながるパートナーシップに発展することを期待します。



### お問い合わせ

公益財団法人 トヨタ財団 国際助成グループ

電話：03-3344-1701

Email: [asianneighbors@toyotafound.or.jp](mailto:asianneighbors@toyotafound.or.jp)







 公益財団法人トヨタ財団

〒163-0437

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号

新宿三井ビル37階 私書箱236号

公益財団法人トヨタ財団 国際助成プログラム

TEL:03-3344-1701

FAX:03-3342-6911

URL:<http://www.toyotafound.or.jp/>

発行：2018年5月

デザイン：NPO法人 Co.to.hana



